し具体的に地球化学の講座を地学系か化学系のどちらに充実するかまた，どちらかに重点をおくことがわるいかという点では必らずしも委員間で一致していない。たとえば地球科学の一分野として地球化学を考えれば原則的に地学系に設立されるべきである。しかし地学系にも種種あり岩石，地質学鉱物教室における地球化学講座は海洋学教室におけるそれとはその研究内容が性格的に非常に異なる。そこで研究対象にこだわらない地球化学講座も必要であって，それらは化学教室内あるいは総合的な規模をもつ地球科学教室内に設置する必要があるなどの議論が存在した。

（3） 大学院に地球化学コースを設けること

実現可能性がありしかし有効な道として大学院に地球化学コースを設けることが提案された。地球化学という領域の修得には，地球科学的知識と化学的素養とが同時に必要であり，特に化学的技術を身につけていることが重要である。この両者を現行の大学制度において2年間の専門課程で修得することは無理である。そこで学部において地学または化学の課程を修了したものが大学院において地球化学者に必要な教育を受ける必要がある。現行の大学院では入試制度の関係もあり学部化学から大学院地学へ，また学部地学から大学院化学へのコースが困難である。そこで独自の地球化学コースが要望される。しかしこのコースが具体的にどこの大学で可能であるかという討論はなされなかった。

（4） 地球化学科の設立について

地球物理学科が既設されているのに応じて，地球化学科を新設されることが望ましいという意見も提出された。日本の地球化学教育の中心をつくる意味でまた総合的な地球化学教育を受け得る特徴をもつ。将来計画にも本案が記載されているが，それに対して現実的問題としては地球化学科の学部学生の就職先は果して確保されるであろうか？地球化学科で果して充分な化学や地学の教育が出来るであろうか。それが中途半端なものにならないであろうか？などの疑問が提出された。

9 地球化学の研究連絡

日本学術会議におかれている各種の研究連絡委員会は国内国外の研究連絡に重要な位置を占めている。にもかかわらず地球化学は独自の研連をもたず連絡は化学研究連絡委員会を通じて行なわれてきた。しかしこの道は必らずしも効果的でなく独自の地球化学研究連絡委員会の設立が必要であると結論された。

この要望は学術会議でとりあげられ1965年には南極特委と並んで地球化学および宇宙化学合同委員会が設置され，また1968年度中には正規の地球化学および宇宙化学研究連絡委員会が設置される筈である。また地球化学と地学など他の関連分野との協力体制を強化することにもっと努力すべきであるとの意見が出された。国際的組織については，1965年IAGC (International Association of Geochemistry and Cosmochemistry) が設立され，本組織を通じての国際的な研究協力連絡の促進が論じられた。

本小委員会の研究体制の討論を通じて国内国外の研究連絡組織について研究者はともすれば無関心になる傾向が明らかにされた。今後は各研究者が研究連絡の重要性を認識するとともに地球化学会としても国内国外の研究連絡を円滑化することに一層努力する必要性が認められた。

(1968. 2. 10.)

学会事務所 名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部 地球科学教室内

ニュース発行所 東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）一国雅巳・石渡良志



# 日本地球化学会ニュース

**No. 43**

**1969. III. 5**

## 第8期日本学術会議の発足にあたって

三　宅　泰　雄

第8期の日本学術会議は1月20日から3日間，第52回総会をもって発足した。新会長には江上不二夫会員，副会長には桑原武夫および吉識雅夫の両会員がえらばれた。第4部長には渡辺武男会員が再選され，本城市次郎会員が副部長におされた。

本学会の会員からは，渡辺武男，三角省三，牛来正夫および私の4名が出ている。

第8期の学術会議の活動は，来る4月にひらかれる第53回総会以後によるが，すでに前期までに政府に勧告された「国体地球科学研究所」「古生物学研究所」「大気物理学研究所」「環境放射能研究所」などの新設の実現に努力しなければならぬことは，いうまでもないことである。

本学会はすでに，第6期のさいに，地球化学研究の将来計画をつくり，長期研究計画委員会に報告を提出した。第8期のあいだに，前の報告を改善し，地球化学研究促進のための具体案をつくり，政府に勧告できるまでにしたいものである。

第7期にもうけられた地球化学・宇宙化学合同委員会は，ひきつづきおかれるよう，第7期からの申しおくりがある。この委員会は日本学術会議が Intnl. Ass. Geochemistry and Cosmochemistry に加盟するまでの暫定的な窓口である。合同委員会の委員は4月に他の研究連絡委員会の新発足をまって改組されるはずである。

常置的な地球化学・宇宙化学研究連絡委員会の新設が，本学会の会員の多くの方から待望されているが，これは IAGC への加盟まちの状態である。IAGC への加盟がおくれているのは，日本学術会議側の責任ではなく，むしろ IAGC の規約の決定が，ソ連などのチェコスロバキヤ侵入で阻害されたことに原因がある。

来年 (1970) の IAGC 国際シンポジウムについては，前記の合同委員会の中に，1970 IAGC シンポジウム小委員会がもうけられ，着々，準備がすすめられている。ちかく，プリリミナリ・アナウンスメントが各国の科学者に発送される。主催については，日本学術会議に要望しているが，まだ，最後的な決定にはいたっていない。

文部省の科学研究費の配分については，1969年度に関しては，日本学術会議と文部省とのあいだで合意が成立し，配分委員のリストもきまった。左右配分の専門区分については，地球化学は従来からいちじるしく不利な立場にたたされていたことはいなめない。

したがって，本学会からは，研究委員会に対し，部の中の専門にまたがる分野についても，十分に考慮されるよう要望書を提出することを考えている。

本会の会員がこぞって日本学術会議を支持され，地球化学の発展のため貴重なご意見をよせられるよう切望してやまない。

# 古生物研究所について

木　越　邦　彦

古生物研究所の設立については，最近かなり具体化しつつあり，またその研究分野に地球化学の1部，あるいは密接な関係のある分野が含まれているので，ここに具体化の状況と研究所の構成についての案などについて御紹介致します。

### 研究所設置計画の経過

古生物学研連委員会が昭和38年に長期計画ワーキンググループを設け，第一次案をつくり，この案は更に日本古生物学会と協同して検討され，第二次案が昭和40年に学術会議総会で審議をうけた。その結果28部門は過大であり10部門程度とすべきことが指摘された。昭和41年に古生物総合研究所小委員会が設立され後述の設立案がつくられ，学術会議はこれを採択し，昭和42年初めに政府に設立方の勧告が行なわれた。小委員会ではその後研究所の運営機構についての基本的な検討を進め，他方研究所の設置場所の選定について具体的な活動を行い，昭和43年には東北大学に附置することが委員会と東北大学間で一応合意に達した。43年秋には東北大学古生物研究所設立懇談会が東北大のうけ入れのため発足した。

### 研究所設立の趣旨

古生物学に関連する科学，特に生物科学，地球化学，分析器機，調査船など機械の進歩は目ざましく，単独の大学，教室などではこれらを活用して古生物の新しい分野への研究を切りひらいてゆくことは困難な現状である。そのため充分の設備のある研究所が流動性のある研究ポストを確保し，いくつかの研究プロジェクトを，他分野出身の研究者参加の下に進めることが必要である。

### 研究所の組織（案）

研究所は教授（1）助教授（1）助手（2）で構成された8研究部門（系統発生，古生物化学，生鉱物学，超微古生物，形態発生，古生態，古生物地理，古生物学応用部門）1研究施設（構成同上），(古生物地球化学測定施設）および2つの客員研究室が予定されている。共同施設としては海洋調査船のほか，電子顕微鏡室，電子計算機室，など15室が予定されている。

### 研究所具体化の現状

先に述べた東北大学古生物研究所設立懇談会と，古生物研小委実行委員会の合同会合が昨年末東北大学で開かれ，管理運営の具体的な面での意見の交換および早期実現をはかるとしたときの建物などについての利用案が示された。東北大学における青葉山への移転にともない，現在片平丁地区にある学部の建物を利用することが可能で，その可能性を見込んで昭和45年度の概算要求を呈出する準備を進めている。年次計画としては次のような実行委員案があり，これに基ずいて東北大学で予算要求案がつくられている。

| 第1年度 | 第2年度 | 第3年度 |
|---|---|---|
| 古生物化学 | 生鉱物 | 系統発生 |
| 超微古生物 | 古生物地球化学測定施設 | 古生物地理 |
| 古生態 | | |
| 形態発生 | | |
| 古生物学応用 | | |

### 地球化学との関連

現在考えられている古生物研究所は，その設立の立案が次の4点を基としている。

1）博物館，大学の古生物学講座で解決するような問題を対象としない。

2）固体地球，堆積学研究所，および生物研連の，研究所を念頭において計画すること。

3）隣接諸分野，とくに生物学や地球化学分野の研究者の参加が望ましい。

4）研究所の規模は10研究部門程度とする。

この基本方針から見ても，計画されている研究所に対する地球化学者の寄与は大きいものと期待されている。

地球化学が直接関与する部門としては古生物地球化学測定施設がある。この部門では施設であるため，古生物学についての研究テーマをもつことは必要条件でなく，測定そのものについての技術面あるいは基礎的研究がそこで行なわれることが望ましいであろう。研究部門で地球化学者が積極的に参加しうる可能性は古生物化学がもっとも高い。古生物化学の研究部門には，生物化学者か地球化学者かの参加が望まれている。発足時にどのような研究テーマが選定されるかはわからないが，研究テーマは固定的なものでなく，期間をおいて，かえてゆくことがむしろ原則となっている。

### おねがい

上述のように古生物研究所は着々と具体化されつつあるので，この研究所が実現したときに有効に利用しうるように地球化学会でも用意しておく必要がある。さしずめこの研究所に対する要望，あるいは積極的に参加される意図をおもちの方は木越邦彦宛（東京都豊島区目白町学習院大理）御連絡いただきたくお願い致します。



---

## IAGC 国際シンポジウム（1970年）

すでにお知らせしましたように，1970年9月7日—12日に，水地球化学・生物地球化学シンポジウムが，東京赤坂の日本都市センターで開催されます。予定されている主要題目は次の通りです。

**Hydrogeochemistry**

1. Water in relation to the earth's evolution
2. Genesis and nature of thermal water and hydrothermal processes
3. Radiochemical problems in the hydrosphere including geochronology
4. Oxidation-reduction and precipitation reactions, properties of authigenic minerals and sedimentation processes in water environment
5. Air-water interaction
6. Hydrochemistry in polar regions

**Biogeochemistry**

1. Nitrogen and carbon cycles
2. Origin of life, paleobiogeochemistry
3. Biogeochemical aspects of natural gas, petroleum, coal and biogenic minerals
4. Biogeochemical effects of human activities
5. Biogeochemistry of soils
6. Biogeochemistry in the hydrosphere

このシンポジウムに関心をおもちの方は下記あてプリリミナリ・アナウンスメントをご請求下さい。

東京都杉並区高円寺北4丁目
気象研究所　地球化学研究部内
1970年国際シンポジウム準備小委員会

---

## 国際鉱物学連合（IMA）・国際鉱床学連合（IAGOD）東京・京都会議（1970年）

IMA 第7回総会と IAGOD 第3回総会の合同会議が本年8月28日から9月2日にわたり，東京と京都で開催されることに決定しました。

この会議では次のようなシンポジウムとほかの学術研究発表が予定されています。

Symposium A: Mechanism of growth and phase transition of minerals
Symposium B: Ore deposits as related to geologic structure and tectonics
Symposium C: Stratabound sulphide ore deposits
Joint Symposium: Geochemistry and crystallography of sulphide minerals in hydrothermal deposits

同会議に参加ご希望の方および関心をおもちの方は下記あて**郵便はがき**で First circular をご請求下さい。

162 東京都新宿区市ケ谷河田町
地質調査所鉱床部内
IMA-IAGOD 準備委員会事務局

なお First circular には仮登録票が付してあり，これを事務局に提出した人に Second circular が送付されます。提出期限は3月31日です。

## 1969年度地球化学会総会のおしらせ

1969年4月4日午前11時15分より神田一ツ橋学士会館本館で総会を開催致します。総会後，科学博物館村山定男氏の講演とアポロ7号，8号の映画の上映があります。多数ご参集下さい。

## 1969年度地球化学討論会予告

会期　10月12日（日）～15日（水）
会場　京都大学
内容　課題討論および一般講演
課題討論
1. 海水および陸水中の微量成分とその存在状態
2. 年代測定の問題点
講演申込〆切日　6月20日（金）
講演要旨〆切日　8月31日（日）
詳しいことは次のニュースに掲載致します。

## 第6回理工学における同位元素研究発表会

昭和44年4月22日（火）～24日（木）に研究発表会が約50学協会共催で開かれますが，日本地質学会からのプロポーズで，下記の通り，パネル討論が行なわれます。ご参加・討論をお願いいたします。
と　き　昭和44年4月23日（水）午后 1:30～4:30
ところ　国立教育会館6階中会議室
（東京虎ノ門，文部省となり）
パネル討論「地球物質の同位体組成」
(1) 地球物質と酸素同位体：杉崎隆一（名大理）
(2) 地球物質と炭素・硫黄同位体：中井信之(名大理)
(3) 地殻物質と同位体：白波瀬輝夫（地質調査所）
(4) マントル物質と同位体：清水孚道（東大理）
長沢　宏（学習院大理）
(5) 地球物質と非平衡系放射能：阪上正信(金沢大理)

## 評議員会報告

○ 10/5/68　東京工業大学
1969年度日本地球化学会討論会開催候補地として (1) 京大理学部，(2) 東海大海洋学部があげられた。
1970年日本で開催される水地球化学および生物地球化学シンポジウム準備小委員会の委員長に三宅泰雄会長が選ばれ，その幹事として三宅泰雄，岩崎岩次，服部明彦，本島公司，杉浦吉雄，猿橋勝子，北野康の各氏が選ばれ実務を行う事になった。又同会に IAGC の幹事として菅原健評議員が出席することになった。同シンポジウムにおいて，第3トピックとして，Isotope Geochemistry についてのセミナーを開くことについての検討小委員会の委員として小穴進也，本田雅健，梅本春次，浜口博の各氏が選ばれた。

○ 12/14/68　名古屋共済会館
1969年度日本地球化学会討論会は京都大学理学部で開催されることに決った。水地球化学および生物地球化学シンポジウム準備小委員会より鳥居鉄也氏を幹事に加えることおよびシンポジウム会場が日本都市センター（東京）に決定した旨報告があった。又，第3トピック小委員会より2つのテーマ (1) Trace element partition among minerals, (2) Nuclear processes in terrestrial and extraterrestrial materials を提案する旨報告があり承認した。

☆　☆　☆　☆

## あとがき

本号は掲載しなければならない記事が多く，そのため科学研究費の申請・配分について本会が日本学術会議に提出した申し入れ書など重要なニュースのいくつかを割愛せざるをえませんでした。これらの記事は次号に載せる予定です。ニュースの内容を充実させ，会員各位のご意見，ご投稿を速やかに活字にするためには紙面の拡充が必要です。今後ともご支援のほどお願い致します。

(M)

☆　☆　☆　☆

学会事務所　名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部　地球科学教室内
ニュース発行所　東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）一国雅巳・石渡良志





# 日本地球化学会ニュース

No. 44

1969. V. 20


## 会則の一部改正と今後の日本地球化学会

一　国　雅　巳

日本地球化学会はこの春の総会で，重要な意義をもった会則の改正を行ないました。一つは本会の会計年度を暦年に一致させたことです。この移行は1970年から行なわれますが，そのために1969年度は12月31日に終わります。従って1969年度は4月から12月までの9カ月ということになりますが，会員の皆さんに実質的なご迷惑をおかけしないよう，この9カ月間に例年の1年分に相当する号数の会誌，ニュースなどを発行することに決定しております。またこれまで4月に開かれていた総会を秋の討論会のときに開くように改め，多数の会員が総会に出席するのに便利なように致しました。会計年度が暦年と一致したため，これまで会誌の1巻が2年にまたがって発行されるという難点は解消し，巻数と年号が揃うことになります。評議員の選挙も今まで3月だったものが12月に行なわれることになり，早速この12月に選挙が行なわれます。もう一つの改正点は，会員の選挙によらないで評議員を指名する道をひらいたことです。来年は地球化学宇宙化学の国際シンポジウムが開催されるなど，本会の活動の範囲も拡大されてきました。本会の評議員は2年に一回の選挙でえらばれますが，2年の間には評議員を追加しないと会の活動の円滑化が妨げられるような事態が起こらないとも限りません。このため，必要に応じて評議員会の慎重な審議を経て，ある活動を達成する上で不可欠の人材を評議員に登用することができるように会則を改めたのです。わが国では年を追って地球化学が盛になってきているとはいえ，まだ研究者の数においても，研究活動においても，申し分のない状態とはいえません。ある地域での地球化学の発展を促進するためには，その地方で討論会や見学旅行を催すなどの措置が必要でしょう。そのときに，その地域の世話役の方に評議員になっていただくことも場合によっては地球化学の発展のために有効な手段ではないでしょうか。今回の会則改正はこのあたりの事情も考慮して行なったものです。このことに密接な関係をもっているのは選挙の方法です。本会はこれまで地域別，専門別を全く考えない形で選挙を行なってきましたが，正会員数もほどなく600名になろうとするとき，選挙をこのままにしておいていいかという問題が生じてきました。たとえば，学術会議の選挙のように，地方別もあわせて考えるのも一つの方法であるという意見も出されています。浜口博副会長を委員長とする選挙方法検討のための小委員会はこの問題と熱心に取り組んでいます。おそらく次のニュースでは同小委員会の答申の内容をご紹介できるのではないかと思います。今回の会則改正が単なる形式上の改革に終わらないためには，会員の皆さんが本会の活動になお一層の関心をもって下さることが必要です。

# 日本地球化学会ニュース

**No. 44**

**1969. V. 20**

## 会則の一部改正と今後の日本地球化学会

一　国　雅　巳

日本地球化学会はこの春の総会で，重要な意義をもった会則の改正を行ないました。一つは本会の会計年度を暦年に一致させたことです。この移行は1970年から行なわれますが，そのために1969年度は12月31日に終わります。従って1969年度は4月から12月までの9カ月ということになりますが，会員の皆さんに実質的なご迷惑をおかけしないよう，この9カ月間に例年の1年分に相当する号数の会誌，ニュースなどを発行することに決定しております。またこれまで4月に開かれていた総会を秋の討論会のときに開くように改め，多数の会員が総会に出席するのに便利なように致しました。会計年度が暦年と一致したため，これまで会誌の1巻が2年にまたがって発行されるという難点は解消し，巻数と年号が揃うことになります。評議員の選挙も今まで3月だったものが12月に行なわれることになり，早速この12月に選挙が行なわれます。もう一つの改正点は，会員の選挙によらないで評議員を指名する道をひらいたことです。来年は地球化学宇宙化学の国際シンポジウムが開催されるなど，本会の活動の範囲も拡大されてきました。本会の評議員は2年に一回の選挙でえらばれますが，2年の間には評議員を追加しないと会の活動の円滑化が妨げられるような事態が起こらないとも限りません。このため，必要に応じて評議員会の慎重な審議を経て，ある活動を達成する上で不可欠の人材を評議員に登用することができるように会則を改めたのです。わが国では年を追って地球化学が盛になってきているとはいえ，まだ研究者の数においても，研究活動においても，申し分のない状態とはいえません。ある地域での地球化学の発展を促進するためには，その地方で討論会や見学旅行を催すなどの措置が必要でしよう。そのときに，その地域の世話役の方に評議員になっていただくことも場合によっては地球化学の発展のために有効な手段ではないでしようか。今回の会則改正はこのあたりの事情も考慮して行なったものです。このことに密接な関係をもっているのは選挙の方法です。本会はこれまで地域別，専門別を全く考えない形で選挙を行なってきましたが，正会員数もほどなく600名になろうとするとき，選挙をこのままにしておいていいかという問題が生じてきました。たとえば，学術会議の選挙のように，地方別もあわせて考えるのも一つの方法であるという意見も出されています。浜口博副会長を委員長とする選挙方法検討のための小委員会はこの問題と熱心に取り組んでいます。おそらく次のニュースでは同小委員会の答申の内容をご紹介できるのではないかと思います。今回の会則改正が単なる形式上の改革に終わらないためには，会員の皆さんが本会の活動になお一層の関心をもって下さることが必要です。

# 総　会　報　告

1.　1968年度事業報告

下記の報告がなされ承認された。

1. 1　総会

4/4/68　関西大学で開催

1. 2　例会

第42回 (6/8/68) 東京大学理学部化学教室

①「宇宙線の隕石におよぼす影響」
東大理　馬淵久夫

②「水圏の dissolved 有機物の particulate への移行の機構と意義」
都立大理　半谷高久

第43回 (12/14/68) 名古屋大学古川図書館

①「岩石，鉱物と酸素分圧」
東工大理　桂　敬

②「海底噴気，温泉堆積型硫化鉱床の最近の研究について（特に黒鉱鉱床と Red Sea の堆積物に関連して）」　名大理　渡辺武男

第44回 (2/8/69) 学士会館本郷分館

①「結晶相互間における元素の分配 —その後—」　岡山大温研　松井義人

②「岩石中の希土類元素について」
東大核研　増田彰正

1. 3　討論会

10/5/68～10/7/68　東京工業大学で開催

課題討論　I-a　火成岩の成分（5日，午前9時～午後1時）

I-b　火成岩の変質（6日，午前9時～午後1時）

II　マグマ発散物と鉱化流動体（7日，午前9時～午後1時）

3日間を通じて午後は3会場で一般講演が行なわれた。

1. 4　評議員会

4/3/68　大阪新阪急ホテル
6/8/68　学士会館本郷分館
10/5/68　東京工業大学
12/14/68　名古屋共済会館
2/8/69　学士会館本郷分館

1. 5　ニュースの発行

No. 39 (6/29/68)；No. 40 (10/20/68)；No. 41 (12/10/68)；No. 42 (12/20/68)；No. 43 (3/5/69) の5回発行した。

2.　1968年度決算報告

下記の決算報告がなされ，承認された。

（収入）

| | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 238,676円 |
| 正会員会費 | 936,971 |
| 賛助会員会費 | 120,000 |
| 会誌購読料 | 597,158 |
| 別刷代，超過頁代 | 294,137 |
| 文部省補助金 | 110,000 |
| その他（利息） | 8,735 |
| 計 | 2,305,677円 |

（支出）

| | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 1,324,900円 |
| ニュース印刷費 | 66,000 |
| 郵便費（会誌，ニュース，例会） | 154,662 |
| 人件費 | 175,908 |
| 編集費 | 20,000 |
| 討論会補助金（2年分） | 40,000 |
| 銀行，郵便局手数料 | 45,447 |
| 事務費（各種封筒など） | 76,638 |
| その他（デザイン，会場費など） | 32,478 |
| 次年度繰越金 | 369,644 |
| 計 | 2,305,677円 |

3.　議決事項

3-1.　1969年度事業計画案

下記の事業計画が議決された。

1)　総会
4/4/69　学士会館　神田一ツ橋本館で開催

2)　討論会
10/12/69～10/15/69　京都大学で開催
10/12/69　課題討論
1.　海水および陸水中の微量成分とその存在状態
2.　年代測定の問題点
10/13/69～10/14/69　一般講演
10/15/69　エキスカーション　三方五湖

3)　例会　1969年6月および12月

4)　特別講演　1969年度総会にひきつづき，アポロ7号，8号の映画と科学博物館の村山定男氏の講演会を開く。そのほか本年度中に1～2回の特別講演会を開く予定である。

5)　評議員会　1969年4月，6月，10月および12

月に開く予定である。

6) 役員の改選　1969年末

7) 会誌の発行　Geochem. J.　4冊，地球化学1冊を発行の予定

8) ニュースの発行　No. 44～48（計5回）発行の予定

3-2.　1969年度予算案

下記の予算案が議決された。

（収入）

| | |
|---|---|
| 前年度繰越金 | 369,644円 |
| 正会員会費 | 750,000 |
| 賛助会員会費 | 180,000 |
| 会誌購読料 | 450,000 |
| 別刷代，超過頁代 | 350,000 |
| 文部省補助金 | 120,000 |
| 広告料その他 | 100,000 |
| 計 | 2,319,644円 |

（支出）

| | |
|---|---|
| 会誌印刷費 | 1,200,000円 |
| ニュース印刷費 | 75,000 |
| 郵便費（会誌，ニュース，例会） | 160,000 |
| 人件費 | 200,000 |
| 追加印刷費 | |
| (G. J. Vol. 1. No. 1. 300部) | 45,000 |
| 編集費 | 40,000 |
| 討論会補助金増額分 | 10,000円 |
| 集会費 | 40,000 |
| 講師謝礼金 | 30,000 |
| 選挙費 | 20,000 |
| 事務費 | 140,000 |
| 銀行，郵便局手数料 | 50,000 |
| 予備費 | 309,644 |
| 計 | 2,319,644円 |

3-3.　会則の一部改正

会則第12条および第14条を下記の如く改正することを決議した。

第12条：　役員の任期は2年とし，改選期は12月とする。役員は再選を妨げない。評議員に欠員を生じた時は評議員会の選考にもとづき会長の指名により補充することができる。但し補欠評議員の任期は前評議員の残余期間とする。なお，特別の必要のあるときは会長は評議員会の議を経て評議員若干名を追加指名することができる。この場合の評議員の任期はその都度評議員会において定める。

第14条：　本会の会計年度は毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

## 1969年度地球化学討論会

共催　日本化学会，日本地球化学会

**日時**　10月12日（日）～15日（水）

**会場**（予定）　京都大学楽友会館（12日）および京都教育文化センター（13, 14日）

**内容**　課題討論および一般討論

**課題討論**

1. 海水および陸水中の微量成分とその存在状態
2. 年代測定の問題点

**講演申込締切**　6月20日（金）

200字程度の講演内容の概略をつけて，下記書式により申し込んで下さい。講演部門はプログラム編成上変更致すことがあります。講演，討論時間は課題討論は30分以内および一般討論は20分以内です。講演はスライド（35 mm）使用に限ります。

**講演要旨原稿締切**　8月20日（水）

講演申し込みが受理された場合には，規定の原稿用紙をお送りしますから，黒インクで清書して下記宛お送り下さい。要旨の字数は原則として課題討論2400字，一般討論1200字ですが，3600字以内なら長くても結構です。

**参加登録料**　200円

本討論会は参加登録制を実施します。ただし学生および予約申込者は登録料を免除します。

**講演要旨集頒価**　1,100円（送料共）

**予約申込締切**　8月20日（水）

**予約申込料**　1,100円（参加登録料は免除されます。）

講演要旨集は印刷部数を限定しますので，参加ご希望の方は講演希望の有無にかかわらず下記書式

で参加申し込みをして下さい。予約者には要旨集を予約金引換で，9月中にお送りする予定です。

**懇親会**　10月12日討論終了後，午後5時30分から同所にて催します。会費800円

**エキスカーション**　日時：10月15日（水），行先：三方五湖（貸切観光バスで日帰り，又は国民宿舎に1泊，翌日現地解散）

費用(A)：日帰りコース1,000円，(B)：1泊コース1,600円，国民宿舎（梅丈ロッジ）を予約しています。

**エキスカーション参加申込締切**　8月20日（水）

参加人員が少ない場合には中止します。

**宿舎**　開催期間中の宿舎のお世話は致しません。

**申込書，要旨原稿送付先**

京都市左京区北白川追分町　郵便番号606

京都大学理学部化学教室　藤永太一郎

電話 (075) 771—8111（内線3242）

講演申込書書式（ハガキ大）　6月20日締切

| 1969年度地球化学討論会講演申込書 | | | |
|---|---|---|---|
| 受付番号 | * | 講演番号 | * |
| 申込者氏名 | | | |
| 連絡先 | | 郵便番号 | 電話 |
| 演題 | | | |
| 発表者氏名および所属 | (ふりがな，講演者に○印をつけて下さい) | | |
| 講演希望部門 | | 決定部門 | * |
| 講演希望時間 | | 決定時間 | * |
| 予定要旨字数 | 1200字 | 2400字 | 3600字 |

*は当方で記入します。予定字数にしたがって原稿用紙をお送りします。

参加申込書書式（ハガキ大）　8月20日締切

| 1969年度地球化学討論会参加申込書 | | | |
|---|---|---|---|
| 受付番号 | * | | |
| 氏名 | | 所属 | |
| 連絡先 | | 郵便番号 | 電話 |
| 懇親会 | 出席，　欠席 | | |
| エキスカーション | 参加 (A)：日帰りコース，<br>(B)：一泊コース（男，女）<br>不参加 | | |
| 送金額 | 予約申込料 (1,100円)，懇親会参加費 (800円)<br>エキスカーション参加費 ((A) 1,000円 (B) 1,600円)<br>合計　円 | | |
| 送金方法 | 現金，　為替 | | |

*は当方で記入します。不要の文字は消して下さい。

## 三方五湖へのいざない

敦賀を拠点とする若狭路はまだ荒らされていない自然の良さをとどめている。ここから西へ丹後半島までは若狭湾国定公園に指定されている。

三方五湖はこの若狭湾国定公園の代表的な探勝地の1つとして知られている。久々子（くぐし），日向（ひるが），菅（すが），水月（すいげつ），三方（みかた）と呼ばれる5つの湖からなり，その優美なたたずまいと穏やかな水郷の風景は日本海の荒々しい男性的な感じとは対照的に訪れる人々の心をひきつけずにはおかない。これらの湖は暗渠，川，人工堀割などによって互に連がっている。とくに水月湖と久々子湖をつなぐ延長144mの水路，浦見川は江戸中期に切り開かれた人工堀割で，五湖随一の景勝を誇っている。

さて地球化学的にみた三方五湖には一層興味深いものがある。元来五湖はすべて淡水湖であったが，水路堀割によりまず久々子，日向湖が塩水湖となり，さらに1932年からの水路拡張によって水月，菅湖へも海水が流入して半塩水湖となった。

とりわけ興味深いのは水月湖で，水深10m附近を境として上層水と下層水とに明確に区別される。すなわち三方湖からの淡水の流入により表層水中の塩分は極めて少ないが，底層水は多量の塩分を含み，三方湖と久々子湖とが非常に浅いことも原因して，四季を通じて停滞したままである。下層水中にはもはや溶存酸素は測定されず，15m以深になると硫化水素の発生がみられ，その量は30mでは200mg/lにも達する。この硫化水素の発生原因は停滞海水中の硫酸塩の還元によると考えられている。さらにマンガンの多いこともこの湖の特徴である。その含有量は10m附近で最大となり7mg/lにも達する。そのためこの附近の水はピンク色を呈している。全燐量は深さとともに増し，底層水中では3mg/l以上にもなるが，季節変化はほとんどなく，底層水の長期にわたる停滞を物語っている。

観光：国民宿舎「梅丈ロッジ」は水月湖湖畔，梅丈岳を背に建ち，眺望もよい。梅丈岳の山頂から見下ろす複雑な湖岸線の五湖と，日本海の鉛色の海との対照が美しい。山頂へはドライブウェイが完成し，定期観光バスも利用出来る。帰路西へ足をのばして蘚洞門（そとも）めぐり，また歴史の町小浜の国宝めぐりなども興味深い。

# ニュージーランド核科学研究所について

水　谷　義　彦

筆者は1966年9月から1968年11月末まで，この研究所に滞在し酸素及び硫黄安定同位体の地球化学を勉強する機会に恵まれた。この研究所はニュージーランド科学技術研究庁に属し，1959年5月創立という新しい研究所で，ニュージーランドの首都ウエリントン市に近いロワーハット市にある。

所長は硫黄安定同位体・放射性炭素等の地球化学で業績をあげている Rafter 博士で，その下に，研究員約20名，実験助手及び技術員約20名及び事務職員等約10名が働いている。

ここで行なわれている研究は，次の4つに大別される。

**I.　安定同位体地球化学**

質量分析計3台が，それぞれ重水素用，炭素及び酸素用，硫黄用として同位体存在比の測定に用いられている。最近の研究課題には次の様なものがある。1) 共存する硫化鉱物間の硫黄安定同位体の分別を利用する地質温度計の研究。Rafter 博士及び隕石中の硫黄安定同位体の研究に業績のある Hulston 博士が中心となり研究を進めている。天然試料の入手及び合成試料の作製の面でアメリカの研究者が協力している。2) 硫酸塩（イオン）中の酸素安定同位体の研究。筆者は滞在期間の大部分をこの研究ですごした。酸素安定同位体の地球化学中最新の分野で，まだ基礎的研究の段階にあるが，なかには，ニュージーランドのワイラキ地熱水中の硫酸イオンと水の間の酸素安定同位体の分別から，同地熱水の地下温度を推定し実測温度とよく一致する値を得た等，応用面での研究も進められている。現在はイタリヤから Longinelli 博士が来てこの研究を続けている。3) 天然水の D/H 及び $^{18}O/^{16}O$ 比の研究。若手研究員の1人が学位論文の課題としており，火山性熱水から南極の氷に及ぶ広範囲の試料について多数の測定を行なっている。4) 鍾乳石の $^{13}C/^{12}C$ 及び $^{18}O/^{16}O$ 比による古代温度の研究。ウエリントン市にあるビクトリア大学から若手研究者が来て学位論文の課題として研究している。

以上の外に，アメリカから Clayton 博士を招いて作った，$BrF_5$ 法による珪酸塩鉱物の酸素の抽出装置が働いており，変成岩鉱物等の $^{18}O/^{16}O$ 比の測定も行なわれている。

**II.　放射性同位体地球化学**

T 用カウンター，$^{14}C$ 用カウンター及び K-Ar 法による年代決定のための Ar 用質量分析計が働いている。T 用及び $^{14}C$ 用カウンターはどちらも年代測定及び核爆発実験の影響の調査に使われている。K-Ar 法による年代測定にはニュージーランド地質調査所が協力している。

以上の外に Radioactive fallout の研究も行なわれている。

**III.　放射線化学**

**IV.　核物理学**

3 MeV のヴァンデグラーフ加速器が働きはじめたところで今後の活躍が期待されている。

以上の様に広範囲にわたる研究が行なわれているが，これらを見ていて気付いたのは次の様な点である。1) 研究活動の中心は今までのところ同位体地球化学にある。2) どの研究分野でも，外部の研究者との共同研究及び設備の共同利用が盛んであり，排他的雰囲気が少ない。3) 人手不足と研究用資材の入手難が悩みの種となっている。

最近のニュージーランドでは，隣国オーストラリヤへの研究者及び技術者の流出が，新聞などで話題になるほど，激しくなっている。

従って，人手不足は単にこの研究所だけの悩みでなく，ニュージーランドのすべての研究機関に共通する悩みの様である。しかも，この研究所をはじめ科学技術研究庁に属する研究所では，給与水準が大学及び一般会社に比べて著しく低いため，人手の確保は一層困難な様である。研究用資材の入手難は，ニュージーランドが本来酪農国であり，ほとんどすべての工業製品を輸入にたよっている現状では，或程度やむをえないことである。しかし，いかなる原因にせよ，産業の近代化という大任を一手に引受けている科学技術研究庁の研究活動が低下しては，国の将来にとって重大な問題であるため，政府に対して，その抜本的解決を望む声が高い。

最後に，余談ではあるが，最近“ニュージーランド亭主”という言葉が人々の口にされるようであるが，さすがは本場だけに，その家庭サービスぶりは大変なものである。それは，時には，彼等にとって本当の勤務先は家庭の方ではないかと云いたくなる程である。しかし，そんなニュージーランド亭主達は，まわりの人々に対しても，無類の世話好きぶりを発揮する。筆者とその家族が永かったニュージーランド滞在を無事にすごすことが出来たのは，Rafter 博士はじめ大勢のニュージーランド亭主族の親切のお蔭であったと心から感謝している。

（名古屋大学理学部地球科学科）

## 評　議　員　会　報　告

○ 2/8/69 学士会館本郷分館

京都大学理学部で開かれる1969年度地球化学討論会の日程は10月12日（日）に課題討論，13, 14日に一般講演，15, 16日に福井県三方五湖方面へのエクスカーションを行なうことに決った。日本地球化学会の会則のうち，必要な評議員を追加委嘱するための改正案が審議されたが，この件に関しては小委員会で検討することとした。菅原健会員を日本学士院会員に推せんすることを決定した。

○ 4/2/69 学士会館本郷分館

1969年度日本地球化学会討論会の課題討論のコンビーナーとして，課題1「海水および陸水中の微量成分とその存在状態」は重松恒信，西条八束両氏に，課題2「年代測定の問題点」は早瀬一一，木越邦彦両氏に依頼することとした。前回提案された会則一部改正について現行の第12条に“なお特別の必要のあるときは会長は評議員会の議を経て評議員若干名を追加指名することができる。この場合の評議員の任期はその都度評議員会において定める”という条文を追加し，総会にはかることとした。本会の会計年度を暦年と一致させることにし，これにともない会則第12条中の“役員の任期は2年とし，改選期は3月とする”という部分を“役員の任期は2年とし，改選期は12月とする”と改め，第14条を“本会の会計年度は毎年1月1日に始まり，12月31日に終わる”と改めることとし，これを総会にはかることにきめた。1970年IAGCシンポジウム準備小委員会幹事会のセミナー担当幹事として本田雅健評議員を推せんすることをきめた。地球物理学研連委陸水分科会委員候補者として半谷高久評議員を推せんすることとした。本会役員の選挙方法について，検討小委員会（浜口，西村，阪上，松尾，一国各評議員）をつくり検討を進めることになった。

## 新　会　員　(1968. 10. 1.～1969. 3. 20.)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 寺町和宏 | 室蘭工大大学院 | 室蘭工大 | (1968) |
| 坂田　朗 | 電通大 | 都立大理 | (1964) |
| 関口敬介 | 県立高崎女子高 | 阪大工 | |
| 芦沢　峻 | 小山高専 | Arkansas 大 | |
| P. Hahn-Weinheimer | Forschungsstelle für Geochemie | München 工大 | |
| 能田　成 | 京大理地鉱 | 京大理 | (1968*) |
| 石橋　毅 | 九大理大学院 | 金沢大理 | (1965) |
| 加藤穣司 | 九大理地質 | | |
| 水谷達夫 | 都立大理大学院 | 都立大理 | (1967) |
| 秋山紀子 | 都立大理大学院 | 都立大理 | (1963) |
| 落合正宏 | 都立大理大学院 | 早稲田大 | (1964) |
| 向井　哲 | 愛媛大農大学院 | 愛媛大農 | (1968) |
| 寺井　稔 | 都立大理化 | 都立大理 | (1961) |
| 豊遙　秋 | 東大工大学院 | 秋田大鉱山 | (1966) |
| 稲積章生 | 香川大教育 | 九大理 | (1965) |
| 平良初男 | 琉球大理工化 | ハワイ大 | (1967*) |
| 本庄　丕 | 北大理地鉱 | 北大理 | (1956) |
| 田淵博義 | 北大理地鉱 | 島根大文理 | (1967) |
| 箕浦名知男 | 北大理地鉱 | 北大理 | (1967*) |
| 猪木幸男 | 地調地質部 | 北大 | (1946) |
| 岡野武雄 | 地調 | 東大工 | (1948) |
| 浜砂武聖 | 名大理大学院 | 東教大 | |
| G. T. See | Univ. New South Wales | Univ. New South Wales | (1955) |
| Puchelt Harald | | Univ. Tübingen | (1967) |
| David S. Evans | Bondah-Clegg & Co. Ltd. | Univ. Brit. Columbia | (1966) |
| 越智　正 | 香川大農 | 愛媛大 | (1962) |
| 松本　隆 | 岡大温研 | 京大 | (1947) |
| 野原朝秀 | 琉球大 | Utah 大 | (1966*) |
| 戸田一美 | 鹿児島出水高 | 京城鉱山専 | |
| 佐藤和郎 | 東大震研 | 東大理 | (1955) |
| 中川幸一 | 金沢大大学院 | 金沢大 | (1969) |

（カッコ内は大学修了年次，* 大学院修了年次）

**退会者** (68/5/15) 西村赤子，(68/5/15) 高津寺雄，(68/6/26) 安国昇，(68/8/6) 小沢昭弥，(68/12/13) 磯村泰治，(68/12/13) 宮本弘道，(69/3/10) 平塚隆治，(68/9/3) 東洋理化工業（賛助会員），(69/3/27) 三菱化成（賛助会員）

学会事務所　名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部　地球科学教室内

ニュース発行所　東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）　一国雅巳・石渡良志

## 評議員会報告

○ 2/8/69 学士会館本郷分館

京都大学理学部で開かれる1969年度地球化学討論会の日程は10月12日（日）に課題討論，13, 14日に一般講演，15, 16日に福井県三方五湖方面へのエクスカーションを行なうことに決った。日本地球化学会の会則のうち，必要な評議員を追加委嘱するための改正案が審議されたが，この件に関しては小委員会で検討することとした。菅原健会員を日本学士院会員に推せんすることを決定した。

○ 4/2/69 学士会館本郷分館

1969年度日本地球化学会討論会の課題討論のコンビーナーとして，課題1「海水および陸水中の微量成分とその存在状態」は重松恒信，西条八束両氏に，課題2「年代測定の問題点」は早瀬一一，木越邦彦両氏に依頼することとした。前回提案された会則一部改正について現行の第12条に“なお特別の必要のあるときは会長は評議員会の議を経て評議員若干名を追加指名することができる。この場合の評議員の任期はその都度評議員会において定める”という条文を追加し，総会にはかることとした。本会の会計年度を暦年と一致させることにし，これにともない会則第12条中の“役員の任期は2年とし，改選期は3月とする”という部分を“役員の任期は2年とし，改選期は12月とする”と改め，第14条を“本会の会計年度は毎年1月1日に始まり，12月31日に終わる”と改めることとし，これを総会にはかることにきめた。1970年IAGCシンポジウム準備小委員会幹事会のセミナー担当幹事として本田雅健評議員を推せんすることをきめた。地球物理学研連委陸水分科会委員候補者として半谷高久評議員を推せんすることとした。本会役員の選挙方法について，検討小委員会（浜口，西村，阪上，松尾，一国各評議員）をつくり検討を進めることになった。

## 新　会　員　(1968. 10. 1.～1969. 3. 20.)

| | | | |
|---|---|---|---|
| 寺町和宏 | 室蘭工大大学院 | 室蘭工大 | (1968) |
| 坂田　朗 | 電通大 | 都立大理 | (1964) |
| 関口敬介 | 県立高崎女子高 | 阪大工 | |
| 芦沢　峻 | 小山高専 | Arkansas 大 | |
| P. Hahn-Weinheimer | Forschungsstelle für Geochemie | München 工大 | |
| 能田　成 | 京大理地鉱 | 京大理 | (1968*) |
| 石橋　毅 | 九大理大学院 | 金沢大理 | (1965) |
| 加藤積司 | 九大理地質 | | |
| 水谷達夫 | 都立大理大学院 | 都立大理 | (1967) |
| 秋山紀子 | 都立大理大学院 | 都立大理 | (1963) |
| 落合正宏 | 都立大理大学院 | 早稲田大 | (1964) |
| 向井　哲 | 愛媛大農大学院 | 愛媛大農 | (1968) |
| 寺井　稔 | 都立大理化 | 都立大理 | (1961) |
| 豊遙　秋 | 東大工大学院 | 秋田大鉱山 | (1966) |
| 稲積章生 | 香川大教育 | 九大理 | (1965) |
| 平良初男 | 琉球大理工化 | ハワイ大 | (1967*) |
| 本庄　丕 | 北大理地鉱 | 北大理 | (1956) |
| 田淵博義 | 北大理地鉱 | 島根大文理 | (1967) |
| 箕浦名知男 | 北大理地鉱 | 北大理 | (1967*) |
| 猪木幸男 | 地調地質部 | 北大 | (1946) |
| 岡野武雄 | 地調 | 東大工 | (1948) |
| 浜砂武聖 | 名大理大学院 | 東教大 | |
| G. T. See | Univ. New South Wales | Univ. New South Wales | (1955) |
| Puchelt Harald | | Univ. Tübingen | (1967) |
| David S. Evans | Bondah-Clegg & Co. Ltd. | Univ. Brit. Columbia | (1966) |
| 越智　正 | 香川大農 | 愛媛大 | (1962) |
| 松本　隆 | 岡大温研 | 京大 | (1947) |
| 野原朝秀 | 琉球大 | Utah 大 | (1966*) |
| 戸田一美 | 鹿児島出水高 | 京城鉱山専 | |
| 佐藤和郎 | 東大震研 | 東大理 | (1955) |
| 中川幸一 | 金沢大大学院 | 金沢大 | (1969) |

（カッコ内は大学修了年次，*大学院修了年次）

**退会者**　(68/5/15) 西村恭子，(68/5/15) 高津寺雄，(68/6/26) 安国昇，(68/8/6) 小沢昭弥，(68/12/13) 磯村泰治，(68/12/13) 宮本弘道，(69/3/10) 平塚隆治，(68/9/3) 東洋理化工業（賛助会員），(69/3/27) 三菱化成（賛助会員）

学会事務所　名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部　地球科学教室内
ニュース発行所　東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）　一国雅巳・石渡良志



# 日本地球化学会ニュース

No. 45

1969. VIII. 15

## 評議員選挙方法についての問題点

### 検討小委員長に聞く

前回のニュースでお知らせしましたように，日本地球化学会はこの4月に重要な会則改正を致しました。それに関連して評議員の選挙方法についても浜口博副会長を委員長とする選挙方法検討小委員会で討議を重ねております。どのような点が問題になっているのか，またこれからの評議員はいかにあるべきかなどの諸点について浜口博副会長のご意見を伺ってみました。

**問**　選挙方法を再検討しようというのは，どのような理由によるのでしょうか。

**答**　討論会は日本地球化学会にとって非常に重要な行事です。そこで討論会開催地の責任者は評議員に加えるべきであるという意見があって，それができるようにこの4月の総会で会則を改正したわけです。これは評議員の地域的分布にやや偏りがあるために起こってきた事態です。たとえば，この秋に討論会が開かれるのは京都大学ですが，近畿地方からは評議員がでておられなかったので，いろいろ不便なことがありました。このような問題が起こらないようにするために，会則改正に伴なって選挙方法も再検討してはどうかということが評議員会で問題になりました。それは会員数が増えるにつれて，地域別，専門別を考慮する必要がでてきたからです。

**問**　以前の会則には，地域別，専門別を考慮して投票するようにという要望がついていましたが2年前に会則を改めたとき，それを削除してしまった。それなのにまた地域別が問題にされるのは何か時代に逆行しているような感じがします。

**答**　今，申しましたように，ある地方に評議員がいないとそこでは討論会を開きにくいなどという問題があります。それで改正された会則では選挙以外の手続きで評議員を追加しようとするわけですが，それをする位ならば地方別を制度化した方がよいという考えもでてきたのです。これは会員数の増加に伴なって，あらためて地域別の意義が問題になってきたためです。大きな学会では地方別といった考え方がはっきり打ち出されていて，地方支部などもおかれています。地球化学会ではまだ支部制度を設ける所までは行っていません。

**問**　かりに地域別ということになりますと，どのような方法で地域を分けるのですか。

**答**　一応の基準になるのは学術会議でとっている方式です。しかし学問の性質によってはかならずしもその区切り方が最良とはいえない。地球化学についていえば，中国・四国の一部はむしろ九州につけた方がよいという意見もあります。

**問**　地域別ということを前面に押し出しますと，各地域の評議員はどうしても地域代表者的な性格をもつようになりますが，実際上はその評議員が自分の属する地域の会員の意見を代表するのは困難ではありませんか。

**答**　私個人としては，評議員には地域の代表という意識をもっていただいて，その地域の会員に評議員会などについての情報を流し，また会員の意見をまとめる努力をしていただきたいと思っています。

**問**　地域別を考慮して評議員を選ぶとすれば，考えられる具体的な方法にはどんなものがありますか。

**答**　一つの方法としては，各地域ごとの最高位得票者をかならず評議員にすることです。しかし投票は全会員が行なうわけですから，こうして選ばれた人が，その地域の人たちの総意で選ばれたとは限らない。本来地域ごとの代表は，その地域の会員の総意にもとづいてきめるのがよいと思います。また地域ごとに評議員の定員をきめ

るのも一つの方法ですが，選挙が現在のままの方法で行なわれると，地域によっては非常に少ない得票でも評議員になってしまうこともあるし，またその地域の会員の意向が反映されないことも起こりうることです。

問　これまでは地域別だけを考えてきたわけですが，そのほかにも専門別なども考えるべきではないでしょうか。

答　地球化学会が健全に発展して行くためには専門別も当然考えなければなりません。今の選挙方法では専門別の考慮は全くされておりませんし，結果的に評議員は化学の方が多い。会のためには化学以外の出身の方にどんどん評議員になっていただかなければいけません。

問　専門別をどのように規定するかも問題ですが，自分の専門からはなれた分野ですと，どのような方が適任かわからない。としますと以前やっておりました参考候補をあげるというのも一概に捨てたものではないということになりますが。

答　参考候補をあげるには評議員全員の責任において本当に会のために働いて下さる方をあげるべきでしょう。こういうことをしますとどうしても評議員会のお手盛という目でみられ勝ちです。そこで会員に参考候補の推せんを依頼するなど，評議員以外の会員の声が反映されるような方策をとるべきです。また参考候補について地域別，専門別を明記しておくのもよいことでしょう。

問　この春の総会での会則改正によってこの秋には評議員の選挙が行なわれることになりますが，これは従来通りの方法ですか。

答　今の所では，選挙方法検討小委員会としてはすぐに新しい案を出すことはできませんから，おそらく従来の形で行なわれると思います。ただそのときに今までのような問題点があることをよくお考えいただきたいのです。それから会の健全な発展ということからすれば，何も地域代表の評議員が出たから済むというものでもありません。たとえば，地域ごとのセミナーを開催するなど会の活動を盛んにすることを積極的に行なわなければいけません。また地球化学教育の問題も重要で，本会としても将来計画の一環としてこの問題をとりあげることになるでしょう。会員の方で，選挙方法とか，そのほかの会の活動に関心をお持ちの方は，どしどし意見を寄せていただきたいものです。いうまでもありませんが，地球化学会の発展のためには会員の協力を欠かすことはできません。

## IAGC 水地球化学・生物地球化学シンポジウム（1970）について

北　野　　康

日本地球化学会ニュース No. 40 (1968. X. 20) および No. 43 (1969. III. 5) で，上記シンポジウムの準備状況について報告した。現在までに準備小委員を3回，その他に幹事会を6回開いてきた。前の報告につづいて準備したこと，決ったことをまとめて報告したい。

1. 日本都市センターで下記のスケジュールに従って，シンポジウムを開く。

| | Morning | Afternoon | Evening |
|---|---|---|---|
| 1970, Sept. 6 (Sun) | | | Business meeting |
| 7 (Mon) | Opening Plenary | H-1, B-3 | Reception |
| 8 (Tue) | H-2, B-2 | H-2, B-1 | |
| 9 (Wed) | H-6, B-4 | Tour | |
| 10 (Thu) | H-4, B-6 | H-4, B-6 | Business meeting |
| 11 (Fri) | H-5, B-5 | H-3, B-5 | Banquet |
| 12 (Sat) | Closing Plenary | Tour | |

Morning: $9^h30^m - 12^h30^m$

Afternoon: $14^h30^m - 17^h30^m$

H-1　Water in relation to the earth's evolution

H-2　Genesis and nature of thermal water and hydrothermal processes

H-3　Radiochemical problems in the hydrosphere including geochronology

H-4　Oxidation-reduction and precipitation reactions, properties of authigenic minerals and sedimentation processes in water environment

H-5　Air-water interaction

H-6　Hydrogeochemistry in polar regions

B-1　Nitrogen and carbon cycles

B-2　Origin of life, paleobiogeochemistry

B-3　Biogeochemical aspects of natural gas, petroleum, coal and biogenic minerals

B-4　Biogeochemical effects of human activities

B-5　Biogeochemistry of soils

B-6　Biogeochemistry in the hydrosphere

コンビーナーについては只今交渉中。なお，講演の募集のし方などについても只今検討中。

2. セミナーについて

9月14日（日），15日（月）の2日間，東京，神田学士会館（2階）でセミナーを開く，下記の題目が案として出ている。

（a）Trace element partition among minerals

（b）Nuclear process in terrestrial and extraterrestrial materials

3. 準備小委員会幹事

そのご，2名の幹事の追加があり，現在の幹事は下記の通り。

委員長　三宅泰雄

幹　事　岩崎岩次，　北野　康（IAPSO），猿橋勝子，杉浦吉雄（会計），鳥居鉄也（募金），服部明彦，本田雅健（セミナー），本島公司

4. 国内後援団体（順不同）

日本地球化学会，日本化学会，日本海洋学会，日本陸水学会，日本地質学会，日本鉱物学会，日本生化学会，日本鉱業会，日本火山学会，日本古生物学会，日本地下水学会，日本気象学会，日本石油技術協会，日本鉱山地質学会，日本雪氷学会，日本土木学会，日本極地研究振興会，日本石油学会，日本第四紀学会，日本地理学会，日本岩石鉱物鉱床学会

5. 共催国際団体

IAPSO, SCOR, SCAR, IAVCEI, IAGOD は承諾。IASH (IUGG), IMA (IUGS), IUPAC は交渉中。

6. アナウンスメント

プレリミナリ・アナウンスメントは既に，各国の科学者に IAGC Secretary 菅原健から発送された。ファースト・サーキュラーは9月発送の予定。

7. 募　　金

募金団体としては，日本学術振興会に依頼することになった。

8. 会　　計

準備小委員会の運営資金として，シンポジウム参加費の金額（7,200円）または一部の前納を本会会員にもお願いすることにした。御協力のほどを願います。

9. ホテル関係

日本交通公社と相談のうえ，都市センターホテルおよび付近のホテルを予約準備中

10. IAGC と IAPSO との共同シンポジウムを経団連会館で，下記のスケジュールに従って開く。

（a）Man's intervention in the sea
9月14日（日）午後と15日（月）午前中，

（b）Factors governing the distribution of chemical species and nuclides in the sea
9月15日（月）午後と16日（火）午後

## 日 本 IAGC 協 賛 会

日本学術会議が IAGC に正式に加盟するまでは，日本が IAGC の活動に参加するために年額180ドルの会費を払込むことが必要です。この費用を関心のある個人の寄付の形式でまかなうために日本 IAGC 協賛会が発足致しました。会員の皆さまご援助をお願い致します。なお同会の規約は下記の通りです。

**日本 IAGC 協賛会規約**

目的　本会は日本学術会議の IAGC の正式加盟を促進するため本邦地球化学者の協力を図る。

事業・日本学術会議の正式加盟が実現するまで日本が IAGC の活動に参加協力するのに必要な年会費の支弁の道を開く。

・このために必要金額　年180ドルを募集する。

・日本学術会議の正式加盟の完了と共に本会は解散する。

・募金の受入れと管理を名古屋大学理学部水質科学研究施設　北野康氏に委嘱する。

**日本 IAGC 協賛会募金要領**

1. 一口 500円（幾口でも）
2. 送金先：（〒464）名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部水質研究施設　北野　康
3. IAGC 協賛会寄付と明記すること。

発起人一同

代表者　菅原　健　　三宅泰雄
渡辺武男　　岩崎岩次
本田雅健　　北野　康

## 文部省科学研究費補助金の申請，配分における境界領域学術分野のとりあつかいについて

日本地球化学会は，本会の担当するような境界領域の振興のために 1969 年 2 月 8 日付で日本学術会議研究費委員会あて，次のような申し入れをしました。

文部省科学研究費補助金の申請，配分に関して各部に設けられている分科は，いずれも既存の学術分野にかたむきすぎていて，たとえば本学会の担当する地球化学分野のような新興の境界領域の研究者は，申請にさいしての分科の選定，審査，および配分についていちじるしく不利益なとりあつかいをうけてきました。これは昨今叫ばれている境界領域重視の考え方に相反することであることは明白であります。日本学術会議は各部の必要に応じ，各部の内にその部の既存の学術分野にまたがる“共通”の分科を設け，境界領域を担当する諸学会の意見を徴して特に重要な新興の学術分野を指定し，それぞれの学会に審査委員の推せんを依頼するなど，境界領域の研究振興のための効果的な措置をすみやかにとられるようお願い致します。

## 日本古生物学会刊「化石」増刊号「化石硬組織内の同位体」（コロキアム特集）の発刊

内容は去る 43 年 9 月 日本古生物学会第 100 回例会を記念して金沢で開かれた表記コロキアムで発表された論文の中，7 篇を集録したもの。

1. 南西諸島および台湾産二枚貝ならびにさんご化石の炭素・酸素同位体比（酒井均・小西健二・中道修）
2. 水温変化と酸素同位体比（堀部純男・大場忠道・新妻信明）
3. インド洋深海底コアーの炭酸塩温度計法による古水温（堀部純男・大場忠道）
4. 生物遺骸の示す古水温（堀部純男・新妻信明・酒井忠三郎）
5. 古生物に対する放射化学からのアプローチ（阪上正信・高木友雄）
6. 造礁サンゴの $^{230}$Th および $^{231}$Pa 年令と $^{14}$C 年令（大村明雄・小西健二・浜田達二）
7. 骨・貝殻などについての $^{14}$C 年代測定（木越邦彦）

予価 800 円（44 年 7 月末発売予定）（送料共）
頁数（含図表など）80 ～ 90 頁

申込は下記の何れか

1）仙台市青葉山東北大学理学部地質古生物学教室内「化石」係（〒980）
2）東京都文京区本郷 7 丁目東京大学理学部地質学教室内「日本古生物学会」（〒113）
3）金沢市丸の内 1　金沢大学理学部地学教室（〒920）

（1969/7/3）

## 新　会　員（1969. 4. 1 ～ 1969. 5. 30）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 佐藤信次 | 東教大理地鉱 | 東京文理科大 | (1947) |
| 樋口英雄 | 立教大原研 | 関東学院大 | (1965) |
| 鈴木光泰 | 山形大理化 | 山形大文理 | (1961) |
| 金　燦国 | 韓国地調 | | |
| 佐藤壮郎 | 地調鉱床部 | 東大理 | (1964) |
| 片瀬隆雄 | 都立大理大学院 | | |
| 結城アツシ | Univ. Miami | 東大農 | (1967) |

（カッコ内の年号は大学卒業年次）

## 訃　報

本会会員東京大学理学部久野久教授は 1969 年 8 月 6 日逝去された。本会を代表して三宅泰雄会長が葬儀に参列し，弔辞を捧げた。


学会事務所　名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部　地球科学教室内

ニュース発行所　東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）一国雅巳・石渡良志





# 日本地球化学会ニュース

**No. 46**

1969. VIII. 25


## 1969 年度地球化学討論会

主　催　日本地球化学会・日本化学会
会　期　10 月 12 日（日）～10 月 15 日（水）
会　場　京都大学楽友会館・京都教育文化センター

### 日程表

| 日＼時 | 8:30–9:00 | 9:00–12:20 | 12:20–13:20 | 13:20–14:00 | 14:00–16:00 | 16:00–17:00 | 17:00– | 会場 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12（日） | 受付 | 課題討論 I | 休憩 | 課題討論 I | | 特別講演 | 懇親会 | 楽友会館 |
| 13（月） | 受付 | 一般討論 | 休憩 | 一般討論 | | | | 京都教育文化センター |
| 14（火） | 受付 | 一般討論 | 休憩 | 総会 | 課題討論 II | | | 京都教育文化センター |
| 15（水） | エキスカーション | | | | | | | 三方五湖 |

### 第 1 日　10 月 12 日（日）— 京都大学楽友会館 —

**課題討論 I　海水および陸水中の微量成分とその存在状態**

（コンビーナ　重松恒信・西条八束）
—（9:00～12:20）—

座長　重松恒信

12 I 01　両極氷雪中の Si, Ti の含有量（25 分）
（室蘭工大・Caltech・Scripps）
°室住正世，C.C. Patterson，J.T. Chow

12 I 02　湖水・海水中の懸濁鉄と懸濁有機物の分布とその存在状態（20 分）
（都立大理）°秋山紀子，半谷高久

13 I 03　フッ素の溶存状態の基礎的研究
— ホウフッ化錯体の水溶液中における溶存状態（20 分）
（福岡教大化）°守口良毅，細川　巌

座長　杉浦吉雄

12 I 04　海水中のフッ素の存在状態（25 分）
（名大理水研）金森　悟，°野原昌人

12 I 05　熱帯海域におけるヨウ素の存在状態（25 分）
（北大水産）°角皆静男，辺見　隆

12 I 06　炭酸カルシュウムに対するリン酸の共沈澱
— 海水中のリン定量への応用（20 分）
（武庫川女子大家政）°滝山一善，山田ユキエ，原田広子

座長　室住正世

12 I 07　表面海水中の溶存ガス濃度と酸素同位体比（20 分）
（東大海洋研）堀部純男，°重原好次，田野　実，矢崎勝仁

12 I 08　海水中の窒素およびアルゴンの濃度　（20 分）
（東大海洋研）°堀部純男，田野　実

12 I 09　太平洋海水中のウラン含量およびウラン同位体

比（$^{234}U/^{238}U$）（20分）
（東教大・気象研*）三宅泰雄，杉村行勇*，°前田　勝

—(1:20～3:50)—

座長　堀　部　純　男

12 I 10　海水中における $^{238}U$—$^{234}Th$ の非平衡（20分）
（東教大・気象研*）三宅泰雄，杉村行勇*，°松本英二

12 I 11　太平洋海水中のトリウム同位体含量（20分）
（東教大・気象研*）三宅泰雄，杉村行勇*，°安島忠秀

12 I 12　海水および陸水中のマンガン
— 二酸化マンガン微細粒子の分布（25分）
（東海大海洋）°岡部史郎，松本勝時，水口恵美子

座長　細　川　　巌

12 I 13　海水中の Cr 溶存状態（25分）
（京大理）藤永太一郎，°桑本　融

12 I 14　海水中のアルミニウムについて(その2)(20分)
（京大化研・近畿大理工*）重松恒信，°平木敬三*，西川泰治*

12 I 15　日本海における鉄，アルミニウムの分布とその海洋学的意義（25分）
（気象研）杉浦吉雄

—(4:00～4:40)—

特別講演

座長　藤　永　太一郎

12 I 16　海洋微量元素の研究と海洋年令の算定（40分）
（奈良大）石橋雅義

## 第2日　10月13日（月）— 京都教育文化センター —

### A 会 場

—(9:00～12:00)—

座長　山　本　俊　夫

13 A 01　海水の $^{210}Pb$ および $^{210}Po$
（北大水産）角皆静男，°野崎義行

13 A 02　北西太平洋におけるバナジウムの分布
（東海大海洋）°森永豊子，岡部史郎，奈須敬二

13 A 03　太平洋に溶存する $Cr^{3+}$，$Cr^{6+}$ の分布
（京大理）藤永太一郎，°桑本　融，村井重夫

座長　岡　部　史　郎

13 A 04　海水中のランタン，ユーロピウム，銅，マンガンについて
（京大化研・近畿大原研*）重松恒信，田伏正之，°合田四郎*，西川泰治*

13 A 05　海底堆積物のフッ素，塩素含量
（電通大）°和田節子，国分信英

13 A 06　南太平洋におけるホウ酸の分布
（名大理水研）°渡久山章，金森　悟

座長　金　森　　悟

13 A 07　海藻中の亜鉛，銅，マンガンの含有量について
（岡山大農生研）小林　純，°森井ふじ，村本茂樹，中島　進，瀬戸圭子

13 A 08　海藻中のホウ素の定量
（京教大・奈良大*）°山本俊夫，山岡照子，磯田千加子，石橋雅義*

13 A 09　ペルシャ湾海水中の炭酸物質分布
（福岡教大・嘉穂東高校*）°細川　巌，武内　章*

—(1:20～5:00)—

座長　小　坂　丈　予

13 A 10　海底土ならびに海水懸濁物のクロムの含有量
（京教大化）山本俊夫，°門脇　節，石東文明，藤田哲雄

13 A 11　東京湾浅海底土のマンガン，カドミウム含量
（奈良大・金沢大工*）石橋雅義，上田俊三*，°山本善一*

13 A 12　塩類溶液における無定形ケイ酸の溶解速度と溶解度
（名大理水研）加藤喜久雄

座長　西　川　泰　治

13 A 13　草津白根火山湯釜の水質の変遷とその由来（その1）
（上智大理工・東工大地学*）°平林順一，南　英一，小坂知子，小坂丈予*

13 A 14　南極プリンスオラフ沿岸の湖沼の研究
I.　2,3の塩水池の化学組成と evaporite について
（千葉工大・東工大*・広大**）°鳥居鉄也，村田貞雄，小坂丈予*，吉田栄夫**

13 A 15　南極ビクトリアランドのドンファン池の最近の変化について
（千葉工大・東工大*）°鳥居鉄也，村田貞雄，小坂丈予*

13 A 16　ビワ湖の水質の変化
（京大理・岡山大農生研*）°藤永太一郎，小山睦夫，平林　央，森井ふじ*

座長　桑　本　　融



13 A 17　天然水中の2,3の重金属元素の分布（I）
（東工大理）岩崎岩次，小沢竹二郎，°進藤洋一

13 A 18　降水の化学成分と海塩との関連
（北大水産）°中谷　周，角皆静男，西村雅吉

13 A 19　鉄質沈澱物中のバナジウム
（都立大理）荒木　匡

### B 会 場

—(9:00～12:20)—

座長　小　林　　純

13 B 01　降水中の BHC の測定
（都立大理）°落合正宏，半谷高久

13 B 02　九州地方河川水中のカドミウムの分布
（鹿児島大教養・鹿児島大理*）°大西富雄，坂元隼雄*，鎌田政明*

13 B 03　豊平川水系におけるカドミウム，亜鉛，マンガンについて
（北大工）°那須義和，江口静子

座長　那　須　義　和

13 B 04　群馬県某鉱山汚染地区における微量重金属の分布について
（岡山大農生研）小林　純

13 B 06　いたち川水系の水質汚染（その1）窒素汚染について
（富山高専）°布村啓一，寺田龍郎

座長　古　賀　昭　人

13 B 07　温泉のヒ素含有量
（電通大化）柿本嘉之，°坂田　朗，国分信英

13 B 08　温泉水中のホウ素
（東邦大理・東工大理*）°吉池雄蔵，岩崎岩次*，小沢竹二郎*

13 B 09　本邦温泉のトリウム含量
（中部工大・名工大*）°下方鉱蔵，神谷　宏*，尾崎敦子*

—(1:20～5:00)—

座長　国　分　信　英

13 B 10　箱根大涌谷の新ボーリング孔の噴気と強酸性熱水の化学組成の関係について
（都立大理）上野精一

13 B 11　鬼首地熱地域の地球化学的研究
（東工大理）岩崎岩次，小沢竹二郎，吉田　稔，実　政勲，°永嶋　茂

13 B 12　大岳，八丁原地区地熱地帯の深部熱水
（九大温泉治療学研）古賀昭人

座長　椎　川　　誠

13 B 13　指宿温泉の生成機構
（九大温泉治療学研）古賀昭人，°野田哲郎

13 B 14　ゲルクロマイトグラフィーによる水中のケイ酸の研究
（九大理）樽谷俊和

13 B 15　けい華中のアルミニウム
（都立大理）一国雅巳

座長　樽　谷　俊　和

13 B 16　酸性温泉地域における変質岩中のジルコニウム
（都立大理）°今橋正征，一国雅巳

13 B 17　薩摩硫黄島の高温噴気孔に生成する青色昇華物
（東工大理・東工大地学*）°吉田　稔，小沢竹二郎，小坂丈予*

13 B 18　岩石の変朽現象と人工実験（その5）
— 箱根，大涌谷における火山ガスによる変質実験 —
（東工大）小坂丈予，小沢竹二郎，大平洋子

13 B 19　岩石の変朽現象と人工実験（その6）
— 2,3の岩石・鉱物の人工溶出実験 —
（東工大・東京理大工*）°小坂丈予，浦部和順，大平洋子，斎藤和之介*

### C 会 場

—(9:00～12:20)—

座長　半　谷　高　久

13 C 01　核実験および SNAP 衛星に由来する Pu 降下量
（東教大・気象研*）三宅泰雄，°葛城幸雄*，杉村行勇

13 C 02　宇宙線中性子により試薬中に生成した微弱放射能の測定
（東大理）馬淵久夫，°源生礼亮，和田幸男，浜口　博

座長　村　上　敏　治

13 C 03　酸性河川の滲透処理による水質変化
（山形大理）入江敏勝

13 C 04　地下水の塩水化現象に伴う化学成分の動向
（地調）池田喜代治

13 C 05　高松平野の地下水水質の地球化学的研究
（香川大教育）°糸山東一，稲積章生

座長　杉　村　行　勇

13 C 06　松代地域における地下水の地球化学的研究(1)
— 主成分含有量の年変化について —

(名大理・京大防災研*) 北野 康,
°吉岡龍馬*, 奥田節夫*

13C07 新潟天然ガス付随水のホウ素含有量
(姫路工大) °村上敏治, 上杉勝弥,
石原良雄

13C08 北海道天北天然ガス付随水の化学成分
(姫路工大) °村上敏治, 上杉勝弥,
石原良雄

—(1:20~3:00)—

座長 入 江 敏 勝

13C09 炭酸カルシュウム結晶と溶液との間のストロンチウムおよびバリウムの分配定数
(名大理水研) 金森暢子, °北野 康

13C10 水溶液と結晶 ($CaCO_3$) との間の元素の分配定数
(名大理水研) °北野 康, 金森暢子,
渡久山章, 大森 保

13C11 微量元素の地球化学的分配
— 火山岩中の石基と角閃石, 雲母, 斜長石斑晶の間の分配 —
(立教大原研・東大理・原研 RI 研・学習院大理)
°樋口英雄, 小沼直樹, 脇田 宏, 長沢宏

座長 北 野 康

13C12 洋上大気中のアンモニアについて
(北大水産) 角皆静男

13C13 海水の溶存炭水化物の単離と化学構造について
(名大理水研) 半田暢彦

13C14 海水中の溶存有機物の化学的性質
(香川大農) °越智 正, 岡市友利,
青木利夫

13C15 水中における油構成成分の行動
I 海水中の油成分の定量
(都立大理) °小椋和子, 高田利彦,
半谷高久

## 第3日 10月14日 (火) 午前

— 京都教育文化センター —

### A 会 場

—(9:00~12:20)—

座長 半 田 暢 彦

14A01 モデル実験を基礎とした湖水における有機物の分解機構に関する研究
(名大理水研) 小山忠四郎, °松永捷司,
宮野孝生

14A02 湖水における脂肪酸
(名大理水研・三重大水産*) °小山忠四郎,
早川博信, 安達六郎*

14A03 水中溶存有機物の生成経路
(都立大理) °水谷達夫, 半谷高久

座長 半 谷 高 久

14A04 薄層クロマトグラフ法による水中懸濁物中の植物色素の分離定量法
(名大理水研) °柳 勝美, 小山忠四郎

14A05 海底堆積有機物の変質過程 (I), 特にフミン物質について
(都立大理) 石渡良志

14A06 中海堆積物中の有機物
(地調化) °渡部美南子, 水野篤行

座長 小 山 忠四郎

14A07 底泥中の ABS 量について
(都立大理) °安部喜也, 半谷高久

14A08 湖底堆積物および植物プランクトンの炭水化物に関する研究
(名大理水研) °水野恭佑, 半田暢彦

14A09 土壌中のペリレンキノン色素の分布及びP型腐植酸の性質
(名大理・名大農) °佐藤 修, 熊田恭一

### B 会 場

—(9:00~12:20)—

座長 本 島 公 司

14B01 堆積岩中のバナジウム, ニッケル, クロム含有量
(香川大教育) 稲積章生

14B02 堆積岩のハロゲン元素とその挙動 (そのIV)
(群馬大工) 田島栄作, °部所昭雄, 赤岩英夫

14B03 岐阜県美山町附近の石灰岩の炭素同位体について
(地調) 安藤直行

座長 赤 岩 英 夫

14B04 酸分解によって発生する石灰岩中の炭化水素ガスについて
(地調) °藤貫 正, 和田欣也, 米谷 宏

14B05 沖縄中部地区に産するドロマイト鉱のDTA
(琉球大理工・地調) °兼島 清, 藤貫 正

座長 一 国 雅 巳

14B06 沖縄本島南部ガス田地域の有機物について
(地調) °牧 真一, 藤貫 正, 本島公司

14B07 沖縄本島南部ガス田の水地球化学的研究
(地調) °永田松三, 牧 真一, 比留川貴,



川野昌樹

14B08 那覇2号天然ガス井の 850$m$ 層の地球化学的特性
(地調) °比留川貴, 永田松三, 本島公司

14B09 地球化学的方法による地質構造調査
(地調) °本島公司, 藤貫 正, 永田松三,
伊藤司郎

### D 会 場

—(9:00~12:30)—

座長 中 井 信 之

14D01 火山岩中の臭素含有量
(東工大理) °高橋和義, 吉田 稔,
小沢竹二郎, 岩崎岩次

14D02 本邦火山帯による熔岩の化学組成の特性
(気象大) 輿水直文

14D03 岩石発熱量の研究 (5) — 中部地方の岩石試料の U, Th, K の定量について (その1)
(阪府大教養・京大理*) °西村 進,
初田甚一郎*, 浅山哲二, 桂 京造*, 八木伸二郎

14D04 アクチノグラフィーによる造岩鉱物の研究 (その1)
(金沢大地学・金沢大化*) °坂野昇平,
阪上正信*, 中西 孝*

座長 小 沢 竹二郎

14D05 熱水条件における鉛, 亜鉛, 硫化鉱物の合成 (その2)
(名大理) °清棲保弘, 中井信之

14D06 硫化鉄鉱物の熱水合成 (II)
— Pyrite, (anhydrite)
(名大理) °中井信之, 佐野方昂

14D07 硫化鉄鉱物の熱水合成 (III)
— Pyrrhotite, Pyrite (anhydrite)
(名大理) 中井信之

座長 浅 山 哲 二

14D08 明延鉱山龍盛脈のイオウ同位体とセレンの分布
(岡山大理) 山本雅弘

14D09 黒鉱鉱床胚胎層準及びその上下層準の玄武岩類の地球化学
(秋田大教育・Univ. of British Columbia・Kennco Expl. Ltd.) °椎川 誠,
J.Gower J.J.Barakso

14D10 チリー, アンデスーカッパーベルト地域の地化学探査について
(地調) °東野徳夫, 有賀 勲

## 第3日 10月14日 (火) 午後

— 京都教育文化センター —

### 課題討論 II 年代測定の問題点

(コンビーナ 早瀬一一・木越邦彦)

—(2:00~5:00)—

14II01 日本列島の火山岩にあらわれた Sr, Pb 同位体組成の特徴 (25分)
(地調) 倉沢 一

14II02 東アフリカタンザニアの Dodoman 岩系 (古期先カンブリア代) の粗粒状岩の Rb-Sr 年代 (予報) (20分)
(東教大・名大*・名工大**)
°佐藤信次, 飯泉 滋, 加々美寛雄,
丸山孝彦, 周藤賢治, 牛来 正夫,
諏訪兼位*, 宮川邦彦**, 志井田 功*

14II03 黒雲母中の Pb-Sr の拡散について (25分)
(九大理) 柳 吼

14II04 インド洋深海底土のイオニウム－トリウム法による堆積速度の研究 (20分)
(東教大・気象研*) 三宅泰雄, °杉村行勇*,
松本英二

14II05 $^{231}Pa$, $^{230}Th$ による南太平洋深海堆積物の年代測定の検討 (20分)
(金沢大理) °宇津山英夫, 中西 孝,
阪上正信

14II06 Fission track の計数による年代決定の問題点 (25分)
(大阪府大教養) 西村 進

14II07 陸水に由来する試料の $^{14}C$ 年代の信頼性 (20分)
(理研) °浜田達二, 浜田知子

注 ( ) 内の時間は討論時間を含む講演時間
一般討論の場合は20分以内

| | |
|---|---|
| 懇 親 会 | 10月12日 (日) 午後5時30分<br>楽 友 会 館 |
| 総 会 | 10月14日 (火) 午後1時20分<br>D 会 場 |
| エキスカーション | 10月15日 (水) 午前8時 発<br>三 方 五 湖 |

### 1. 会 場 案 内

京都大学楽友会館：京都市左京区吉田近衛町
TEL (075) 771—8111 内線 5474
京都教育文化センター：京都市左京区聖護院川原町 4
TEL (075) 771—4221

〔交 通〕

市電は京都駅前から⑥番で，四条河原町から①番で，市バスでは京都駅前又は京都駅八条口から(65)番で，教育文化センターは「熊野神社前」下車，楽友会館は「近衛通り」下車，所要時間約30分。

タクシーは京都駅前より約250円，15分

なお，会場案内図など詳細は講演要旨集に掲載予定です。

### 2. 宿 舎 の 予 約

希望者は下記あて直接お問い合わせ下さい。案内状を差し上げます。

京都受験旅館連盟：京都市左京区聖護院川原町新道
TEL (075) 761—2053 但し夜間は 761—1592
(代表者 中村和夫 宅) へ

宿泊料 1,500～2,500円 (税，サービス料別)

### 3. 参 加 予 約

8月20日 (水) までに予約金1,100円 (要旨集および送料共) を添えて下記あてお申し込み下さい。

京都市左京区北白川追分町 (〒 606)
京都大学理学部 化学教室 藤永太一郎
(地球化学討論会参加申込書在中と明記して下さい。)

### 連 絡 先

京都市左京区北白川追分町 (〒 606)
京都大学理学部 化学教室 藤永太一郎 気付
1969年度地球化学討論会実行委員会
電話 (075) 771—8111 内線 3242

☆ なお，ニュース発行がおくれましたので参加予約〆切日は9月20日まで延期します (必着のこと)。それ以後は当日受付とします (参加登録料200円加算)。


| | |
|---|---|
| 学会事務所 | 名古屋市千種区不老町<br>名古屋大学理学部 地球科学教室内 |
| ニュース発行所 | 東京都世田谷区深沢 2-1-1<br>東京都立大学理学部化学教室<br>(編集担当) 一国雅巳・石渡良志 |





# 日本地球化学会ニュース

No. 47

1969. XII. 4


## 地球化学教育の問題点
### —将来計画の一端として—

松 尾 禎 士

地球化学を織物にたとえるならば，特殊の一般化，あるいは逆に特殊における一般の否定などの方向をたての糸とみなし，歴史科学として自然現象をとらえる方向をよこの糸にみたてることができるかもしれない。この織物のたとえは，地球化学のみならず，地学一般についていえると思うが，地球化学における現実的な研究手段は，いわゆる化学における手法である点で地学一般と区別される。

学問の細分化と統一化がすさまじい勢で進行している現状ではあるが，一方では地球化学にはあきらかに境界の学問としての性格がある。たとえば，地球化学で扱われる固溶体の理論的研究は熱力学そのものへのフィードバックたりうるし，逆に弾性体理論や配位子場理論が，元素の分配の理解に強力に役立つ。

化学的手法 (実験技術ももとよりふくまれる) を有効に使える人々を地球化学者というならば，そのような一群の人々は，他の地学者と教育的背景によって区別されるのはやむを得ない。現実には同じ対象を研究しても，“地球化学者”のやる学問が地球化学であって，“岩石学者”のやる学問が岩石学なのである。このことは学会活動にも反映し，たとえば本会の評議員は，ほとんどが化学者として教育をうけた人々からなっている。

教育的背景の差異は，一人の研究者にとっても，あるいはこれから研究者になる学生にとっても大きな制約になっている。そのため情報や，研究者自身も一定の集団に閉ざされがちになる。血統と価値観 (自然観) のことなる集団が，各々発展する意志をもつならば，それを実現する方法は，ことなる集団同志のインパクトを求め合うことである。一つの具体的方法は混血化であるが，反面その集団が独立に存在する意義を認めるならば断固純血を守る努力をすることも他集団へのインパクトになりうる。

ここで地球化学の教育体制について，いくつかの可能性を考えてみよう。第一は将来の地学研究者の間の教育的背景の差をとりさってしまう方向に体制をかえる；第二は従来の関連教育機関の中で地球化学の教育を行なう；第三に独立した地球化学の教室をつくる；などが考えられるが第三ははるか将来にのみその存在意義があるであろう。第一の行き方は，たとえば名古屋大学のように一つの教育機関で地学関係の研究教育機関を統一したクラスターをつくり，地球化学の教育もその中の一環として行なうことである。第二は既存の化学教室，地学関係教室の中に地球化学の講座をつくり，その教室の特色の中で地球化学の教育を行なうことである。

この二つの行き方から考えられる一般的な効果を比較してみよう。第一の行き方では，そのような教育機関で育った学生は，将来専門分野へ分かれて行っても，情報の交換が個人的に行なわれやすい。教官の立場からも他分野の教育的背景の異なる人々との日常的接触によって研究上のインパクトをうけることが多い。一方大学院を含めたカリキュラムの編成には余程気をつけないと基礎的知識のたりない学生がふえる。第二の行き方においては混血化はかぎられる。しかし全体的にみれば多様な地球化学者が育つ可能性がある。たとえば地球物理の教室出身の地球化学者と化学教室出身の地球化学者との接触そのものがすでにインパクトになりうる。一方この行き方は他集団への侵入とみなされて，純血が叫ばれれば実現の望みはうすい。

上にいくつかの可能性の比較をのべたが，地球化学の教育機関の拡充は，実はどのやり方がよいかどころの話でなく，あらゆる可能性を求めて緊急に行なわなければならない現状であるのは以下にのべるとおりである。

本会の会員構成からみた地球化学者の実体を統計によってみてみよう。1966年10月現在での会員数は457で，そのうち学生会員を含めて20才台の会員は約30名(6.6%)である。1967年に Geochemical Journal が発刊されてからは会員数がかなり増え，1969年8月現在では573となり，学生会員は45名(7.9%)，20才台の会員はおそらく60名程度であろう。会員構成からのみて，若い会員の比率は漸増しているが，たとえば日本化学会の1969年現在の会員数，32569のうち約40%が20才台の会員（学生会員のみでは約16%）であることを考えると，はなはだしい違いである。日本地質学会は本会とみかけ上事情が似ていて，1969年10月末現在で会員数，2662に対して学生会員は194(7.3%)であるが，この場合は学生の加入が進んでいないためとみられる。

このように本会の会員構成からみて，教育機関の拡充がなければ，若い地球化学者の供給はまさに絶望的である。地球化学は他の地学にくらべて，その性格に本質的な差があるわけではないが，研究の手法がことなる点で特定の分野として発展し，その存立の意義もみとめられて来た。日本の地球化学の発展は，地学全体の発展と軌を一にしているからには，地学研究者全体の支援と調和がはかられなければ可能でない。そのための学会間の連繋，統合といった問題は，今回は紙数の関係でふれることができなかった。

## 総　会　報　告

1969年10月14日京都教育文化センターにおいて三宅泰雄会長が議長となって会員約80名出席のもとに臨時総会が開催された。なお来年度からは秋の討論会の折に定期的に総会が開かれることになっている。

1. 1969年度事業中間報告

1.1 総　会

1969年4月4日　東京神田一ツ橋学士会館で開催

1.2 例　会

第45回（1969年6月14日）　学士会館本郷分館

(1) 黒鉱鉱床に伴う硫酸塩鉱物（石膏，重晶石）の同位体比 ($^{18}O/^{16}O$, $^{34}S/^{32}S$) について

岡山大・温研　酒井　均

(2) ニュージーランドに於ける硫酸塩（イオン）の同位体比 ($^{18}O/^{16}O$, $^{34}S/^{32}S$) の研究について

名大・理　水谷義彦

第46回（1969年12月13日）　名古屋で開催の予定

1.3 討論会

1969年10月12日～14日　京大楽友会館と京都教育文化センターで開催

課題討論 I　海水および陸水中の微量成分とその存在状態（10月12日）

課題討論 II　年代測定の問題点（10月14日）

1.4 評議員会

1969年4月2日　東京学士会館本郷分館

1969年6月14日　東京学士会館本郷分館

1969年10月13日　京大楽友会館

なお1969年12月13日には名古屋で開催の予定

1.5 ニュースの発行

No. 44 (1969. 5. 20), No. 45 (1969. 8. 15), No. 46 (1969. 8. 25) 以下 Nos. 47 と 48 は年内発行の予定

1.6 1970～1971年度評議員選挙結果

| | | |
|---|---|---|
| 一国雅巳 | 岩崎岩次 | 梅本春次 |
| 小穴進也 | 佳　敬 | 木越邦彦 |
| 北野　康 | 酒井　均 | 阪上正信 |
| 菅原　健 | 中井信之 | 西村雅吉 |
| 浜口　博 | 半谷高久 | 本田雅健 |
| 松井義人 | 松尾禎士 | 三宅泰雄 |
| 本島公司 | 渡辺武男 | （50音順） |

1.7 編集委員会

1968年度に発行さるべき“地球化学” Vol. 2, No. 1は6月に発行され，また“Geochemical Journal” Vol. 3, No. 1は近日中に発行の予定である（11月発行）。1969年度の会誌としては“Geochemical Journal” Vol. 3, No. 2が12月に印刷される予定である。



2. 1969年度会計中間報告

下記の会計中間報告（4月1日～10月4日）がなされ承認された。

| | |
|---|---|
| （収入） | |
| 前年度より繰越 | 369,644 円 |
| 正会員費 | 537,526 |
| 賛助会員費 | 200,000 |
| 会誌購読料 | 262,776 |
| 別刷代その他 | 57,755 |
| 広告代その他 | 25,111 |
| 文部省補助金 | 100,000 |
| 計 | 1,552,812 円 |
| （支出） | |
| 会誌等印刷費 | 102,500*円 |
| ニュース印刷費 | 60,100 |
| 郵便費 | 105,082** |
| 人件費 | 92,699 |
| 編集費 | 20,000 |
| 討論会補助金 | 10,000 |
| 講師謝礼金 | 20,000 |
| 銀行等手数料 | 19,275 |
| 例会・委員会等会場費 | 12,800 |
| 事務費 | 57,486 |
| 計 | 499,942 円 |
| 差引残高 | 1,052,872 円 |

（註）* Geochemical Journal, Vol. 1, No. 1. 200部および選挙用印刷費を含む。

** 前年度に印刷費を支払ずみの Geochemical Journal (1回)，地球化学 (1回)，本年度のニュースおよび選挙用の郵送費を含む。

3. 1970年度事業計画案

3.1 総会　1970年11月

3.2 例会　1970年2月，6月，12月

3.3 討論会　1970年11月末に東海大学（清水）で開催の予定

3.4 IAGC シンポジウム（本会後援）
1970年9月6日～12日

3.5 評議員会　1970年2月，4月，6月，11月12月

3.6 ニュースの発行

Nos. 49～53の5回発行の予定

3.7 会誌の発行

1969年度に発行さるべき“Geochemical Journal” Vol. 3, No. 3; Vol. 3, No. 4 および“地球化学” Vol. 3, No. 1の発行がもちこされる予定である。1970年度分（暦年と一致する）としては“Geochemical Journal” Vol. 4が4冊と“地球化学” Vol. 4, 1冊を発行する予定である。またそのために論文の投稿を歓迎する。

4. 1970年度予算案

下記の予算案が議決された。

| | |
|---|---|
| （収入） | |
| 前年度より繰越 | 300,000 円 |
| 正会員費 | 750,000 |
| 賛助会員費 | 180,000 |
| 会誌購読料 | 500,000 |
| 別刷代，超過頁代 | 350,000 |
| 文部省補助金 | 100,000 |
| 広告代その他 | 150,000 |
| 計 | 2,330,000 円 |
| （支出） | |
| 会誌印刷費 | 1,300,000 円 |
| ニュース印刷費 | 80,000 |
| 郵便費 | 170,000 |
| 人件費 | 250,000 |
| 編集費 | 60,000 |
| 討論会補助金 | 40,000 |
| 例会・委員会等会場費 | 40,000 |
| 講師謝礼金 | 20,000 |
| 事務費 | 150,000 |
| 銀行等手数料 | 50,000 |
| 予備費 | 170,000 |
| 計 | 2,330,000 円 |

5. 会則の一部改正

近い将来において，事務所移転の必要性が予想されるので，それに備えて会則第15条の一部改正を提案し，会員の承認をえた。

第15条　本会の事務所は名古屋市千種区不老町 名古屋大学理学部地球科学教室内におく。

改正案はアンダーラインの個所を新住所に読みかえるものである。

## 東大海洋研究所の共同利用について

東大海洋研　堀　部　純　男

海洋研究所の共同利用は，現在下記のものが実施されており，目下昭和45年度の公募を行なっております。なお，申込みの締切は船に関しては12月15日，所内施設に関しては明年1月15日になっています。

(1) 研究船淡青丸

(2) 研究船白鳳丸

(3)　研究会
(4)　外来研究員

申込み資格はいずれも国，公，私立大学その他の研究機関の研究者ならびにこれに準ずる者で海洋の基礎的研究に従事するものとなっています。なお，公募に関する詳細は各大学，関係機関に配布されているが，ここではその概要を各項目ごとに紹介したい。

(1)　研究船淡青丸

本船は昭和39年就航し，40年度より共同利用に供されている260トンの研究船で主として近海の7日～10日の研究航海に使用されている。1回の乗船人員は10名以内である。採水，採泥に必要な機器をそなえ，船上の実験室においても分光光度計などの使用は可能である。各年度の航海計画は公募の結果，決定されるが，一年間の船の運航日数は200日である。

(2)　研究船白鳳丸

本船は昭和43年度より共同利用に供されている主として遠洋航海洋の大型船（3200トン）であって，乗船研究者数は32名，各種の実験室は9室ある。実験室の振動はほとんどなく，実験用電源もきわめて安定しており，陸上の研究室と大差なく船上で研究が行なえる。本船の運航計画は海洋に関係のある地球科学者によるシンポジウムによって，昭和45年度までの運航の大綱が決定されており，明年度はその最終年度にあたる。昭和45年度の運航計画は表1に示してあるが，この中でとくに化学関係に重点がおかれているのは KH-70-2 北太平洋の航海である。

表1.　昭和45年度白鳳丸運航計画

| 航海番号 | 海　域 | 期　間 | 日数 | 関連分科会 |
|---|---|---|---|---|
| (昭和44年度) KH-70-1 | 北太平洋 | 昭和45年 2月3日～3月5日 | 31 | 物理，化学 |
| (昭和45年度) KH-70-2 | 北太平洋 | 4月14日～6月18日 | 66 | 物理，化学 |
| KH-70-3 | 九州南方 | 7月3日～7月22日 | 20 | 物理(気象) |
| KH-70-4 | 日本海 | 7月29日～8月31日 | 34 | 生物，水産 |
| KH-70-5 | フィリッピン海盆 | 昭和46年 1月21日～3月23日 | 62 | 地物，地質 |

(3)　研究会

研究会は (a) いわゆる討論会形式の比較的多人数の1～2日間のもの (b) 限られた人々による数日間にわたるものなどが考えられています。本年度は試験的に (a) の形式のものがいくつか実施されています。申込みにあたっては，海洋研究所の最も関連の深い部門と連絡を取って，下記の事項について打合せをして戴くことになっています。1. 研究会の名称，2. 提案理由，3. 開催希望月日，4. 参加予定者数，など。

(4)　外来研究員

所外の研究者が海洋研究所に滞在して研究を行なう便宜を提供することを目的としているものです。目下のところ，特定の籍などはありませんので，各研究室内で実施することになります。申込みにあたっては，1. 研究テーマ，2. 滞在予定期間，3. 必要経費，4. 研究の内容などを関連の深い部門と連絡を取って打合せて戴くのが好都合です。

これらの共同利用の申込みの採否，運航計画の決定は共同利用施設運営委員会で行ないます。現在の同委員会のメンバーは下記の通りです。

委員長　名大　名誉教授　菅原　健
東北大　助教授　金谷　太郎
東大震研　教授　南雲昭三郎
名大理　〃　西条　八束
東大理　〃　吉田　耕造
東大海洋研　〃　内田清一郎
〃　助教授　寺本　俊彦
〃　教授　丸茂　隆三
〃　〃　西脇　昌治
〃　〃　堀部　純男

なお，化学関係の詳細の問合せ，打合せ先は下記の通りである。また，(3)，(4) の正式申込用紙は事前の打合せ終了後にお送りすることになっております。

問合せ，打合せ先（化学関係）
東京都中野区南台 1-15-1
東大海洋研究所
海洋無機化学部門　堀部純男
電話 03-376-1251

## お　知　ら　せ

### 1970年度地球化学討論会について

すでに総会記事の所に書いてありますように，来年度の討論会は静岡県清水市の東海大学で11月末に開催される予定です。討論題目その他につきましては追ってお知らせ致します。


学会事務所　名古屋市千種区不老町
名古屋大学理学部　地球科学教室内
ニュース発行所　東京都世田谷区深沢 2-1-1
東京都立大学理学部化学教室
（編集担当）一国雅巳・石渡良志





# 日本地球化学会ニュース

No. 48

1970. II. 26


## 地球化学会の行事
## —とくに例会と討論会について—

一国雅巳・石渡良志

今からおよそ2年前，庶務担当評議員の交代に伴なってニュース編集担当者が変わりました。そのときニュースに会員からの意見をできるだけ載せることをお約束しました。しかし紙面の都合もあり，それはほとんど実行されませんでした。この2年間に地球化学会の行事その他についていろいろ意見，感想をいわれた方もありましたが，それをまとめて発表する機会もなく，ついに現在のニュース編集者が担当する最後の号をむかえました。

そこで今まで伺ってきた会員からの意見にわれわれの考えを加味し，下記の文をまとめました。

地球化学会の新評議員会は，これらの会員の意見を参考にして今後の方針を立てていただきたいと思います。

——例会の講演者や講演の題目はどのようにしてえらばれるのか知りたい。

——行事担当の評議員がいて，適当な方に相談して候補者を評議員会に推せんしている。この方式ならばある程度は会員の意向が反映されるのではないか。

——しかし，場合によると行事担当評議員が候補者をみつけるのに苦労するという話もあるが。

——例会に続いて評議員会があるというきまりはどうなのか，聴いている人は評議員が多いように思う。

——例会には外国から帰ってきた人の話が多いが，たまには討論会の課題討論でも話す時間が不足だったものをじっくり聴いてみたい。

——今までは講演者に旅費の支給ができなかったので，講演をお願いする人の範囲が限定されてしまったが，今後は改善されるのではないか。

——毎年月の例会は人の集まりがよくない。

——役所は年度末になるし，大学関係は試験で時期がよくない。現在，例会は2月，6月，12月にあるが2月でなければいけないという必然性はないようだ。

——東京以外で開いた例会は名古屋の2回だけだが，ずいぶん聴く人が多かった。

——内容もある程度は開催地の希望をきいている，東京の例会はどちらかといえばお座なりの感じだ。

——出席者が一般に少ないのだから，例会の講演要旨を以前のようにニュースかなにかに載せてはどうか。

——なぜニュースに講演要旨がでなくなったのか，多分学会誌がでるようになってからだと思うが，“地球化学”に講演要旨を総説的に書いて載せたらよい。

——それにしても“地球化学”はなかなか発行されないたまにしか出ないから投稿する人もない。そこでますます出にくくなる。悪循環だ。年三回位発行されれば投稿する気になるが。

——例会の講演者のことだが，たとえば地質関係の人で海外の研究所へ行ってきた人などを評議員会へ紹介するようにしなければならない。これまで学会活動に参加していなかった人を積極的に引き出す努力が必要だ。

——地球化学会では講演しても反響がなくてつまらないという人がいた。地球化学という以上は，もっと岩石の成因などに関した議論をするようにしないと，地質関係の人たちの参加は望めない。

——最近地学関係の講座で地球化学の色彩の強いものができたが，そこを学会として支援することも必要ではないか，その目的に例会や討論会を利用してはどうか。また，化学教室で地球化学をやっている人の多くは恵まれない環境のもとにいる。

——一体例会をやる意味があるのか。